第二十四講　言語論

二十世紀にはいってからの、言語についての理論や学説の交代には、目をみはるほど激しいものがある。それでは、あたらしい理論は、以前のふるい理論が克服された結果として出現したのかといえば、そうではない。それは、時代の、あるいは理論家個人の趣味にあわなくなって、単に廃棄され、とりかえられるにすぎない。こうしたことが、留保なく、いくぶん大胆にいいうるのは、とりわけ日本のような、理論的な周辺地帯においてである。では、こうした理論の入れかわりは意味のないものかといえばそうではない。まさに、その転変の契機にこそ、言語内・外のイデオロギー的な背景があり、それだからこそ、言語学史には特別の関心が寄せられるのである。

ところで、あたらしく躍り出た理論がスマートにみえるのは、主として共時的(注)な分析や記述の手順においてであって、人類史の展望のなかで、言語とはどういうものかという問題になると、まことに古色蒼然たる、そして、ほとんどは言明されることのない仮定がかげにかくされている。この仮定は学問的には十九世紀の生物進化論を核に形成された、インド・ヨーロッパ語比較言語学として実現している。その内容を具体的にいえば、人類の言語は単純な構造から複雑な構造へと進化するものであり、その発展段階の相異は、あたかも生物種がそうであるように、相互に混血を許さぬ、ことなる系統として分立しているというものである。わたしたちがある言語の性格を説明するときに、その言語がスラヴ系だのアルタイ系だのというのは、いかに便宜のためだとはいえ、厳密にいえば、生物学的言語系統主義にもとづいて説明するという、欺瞞（ぎまん）に手を汚していることを知っていなければならない。

この進化主義は、じつは至るところで破綻している。そのひとつは、進化したはずのあたらしい言語ほど単純で、ふるい言語ほど複雑になっていることで、これをたとえば英語とサンスクリット語との対比においてみることができる。しかし、こういう問題があることを理論の制作者がしらぬわけはなく、すでに十九世紀において説明が試みられている。

比較言語学のもっと重要な前提は、生物において異種間の交配がありえないように、ことなる言語相互間の交配もありえないという考え方である。こうした「［Ａ］体系」をもっともよく体現しているものとして、文法がもちだされる。たとえば、英語

と日本語の文法をまぜあわせた混合文法などというものは考えられない。互いに相手の言語の影響を強く受けているとしても、所詮は、日本語であるか英語であるかのどちらかだと主張される。

　こうした考え方が実践面にあらわれると、自分の母語が異言語によって汚染されることを極度に不快と感じる［B］になる。ましてや、文字も知らない未開の蛮族が、西洋人の上等言語を、自分流に使いよくくずしてできたピジン語などは、ことばの名にあたいしない、できそこないだと考えられるのはしごく自然のことである。また、使うほうにとっても、おまえの英語は、「日本人の英語」だときめつけられれば恥入るしかないのだが、しかし、そのできそこないのことばしか、ほかに知っていることばがなければ、引きつづいて使っていくしかない。

　ところが、言語純血種論こそが言語科学の基礎だという十九世紀の風潮のなかで、オーストリアの[C]フーゴ・シューハルトは、もともとすべての言語は混合の結果であるとして、むしろ混合のなかにこそ言語の本質をみいだそうとしたから、奴隷や交易商人たちの使う、できそこない言語をとりわけ熱心に研究した。言語学の領域でも、こうした人は、充分に変わった人であるとみられたが、ましてや、由緒ただしい文章を重んじるはずの作家が、フランス語をひどくくずした、アンティル諸島のクレオール語を聞いたとき、それを「世界のうちでもっとも流麗で快い」言語だなどと讃美したら、気が変だと思われるだろう。だがこのことばに魅(み)せられて、ついにはその俗謡集まで編んで刊行したのが、日本に来る前のラフカディオ・ハーンであった。しかもシューハルトは、ハーンのこの刊行物にちゃんと注目していた。

　近代国家が誕生する以前の、文字のないことばとことばとの境界は、いまよりはるかに移行的でゆるやかであった。ところがそれに境界をほどこして、相互に切断したのは国家であった。じつに国家の出現は、ことばの性質を変えてしまったのである。ところで、生物種的系統論と、言語混交論とのあいだにある、言語に関する重要な観点の相異に気がついておく必要がある。すなわち、前者においては、言語が不動の主体であって、人間は、それを単に［D］に使わされているだけなのである。言語は種として不変であるから、人間の力は、言語を変えるには至らない。いっぽう、後者においては、主体は人間であるから、かれは言語を必要に応じてつくり変えもし、外来の要素とごちゃまぜにもするのである。

　方法としては、言語を不変の主体として固定したうえで仕事をはじめたほうが楽であることはいうまでもない。しかし、それでは、「言語の学」はいつまでたっても、「人間の学」にはなりえないのである。おそらく、言語学者はそのことを知っていて、

そこに踏みとどまっているのであろう。

（田中克彦『ことばのエコロジー』）

（注）共時的……通時的（歴史的・時間的）の対義語で、この場合は言語をすでに完備された、時間的に推移しない不動の構造物としてみる見方

問１　空欄［A］を補充するのに最も適当なものを、次の選択肢から一つ選べ。

①　複雑な　②　素朴な　③　閉じた　④　難渋な　⑤　混在した

問２　空欄［B］を補充するのに最も適当なものを、次の選択肢から一つ選べ。

①　論理実証主義　②　言語純化主義　③　言語混血主義　④　環境保護主義　⑤言語流動主義

問３　傍線部Ｃ「フーゴ・シューハルト」について次の（１）（２）の問に答えなさい。

（１）「フーゴ・シューハルト」の学問上の立場を端的に表現している語句を本文中より抜き出せ。

（２）「フーゴ・シューハルト」の意見とは対照的（対立的）な意見の土台をなす考え方を七十字以内（句読点も字数に数える）で説明せよ。

問４　空欄［D］を補充するのに最も適当なものを、次の選択肢から一つ選べ。

①　受動的　②　積極的　③　能動的　④　間接的　⑤　暴力的

第二十四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　田中克彦＝たなか　かつひこ（一九三四〜）兵庫県生まれ。東京外国語大学モンゴル語学科卒、一橋大学大学院社会学研究科修了。言語学・社会言語学者。語学の達人のひとりです。モンゴル語、ロシア語、英語、ドイツ語、その他多数の言語をマスターしているそうです。ご自分があまりにデキル人であるためでしょうか、大学で指導していた学生にも非常に高い水準を求める、とっても厳しい先生だそうです。

○ラフカディオ・ハーン（一八五〇〜一九〇四）アイルランド出身のイギリス軍医が父、ギリシャ人の女性が母親。イギリスやフランスで教育を受け、アメリカで新聞記者となって一八九〇年に来日。その後英語教師として日本各地で教鞭をとる。一八九六年、日本国籍を得て「小泉八雲（こいずみやくも）」と名乗る。耳なし芳一の話や雪女など日本各地の幽霊話を収録した『怪談』はあまりに有名。

語句

エコロジー→生態学

目を見張る＝めをみはる→驚いたり感心したりして、目を大きく見開く様子

関連語１　目覚ましい→目が覚めるほどすばらしい、注目にあたいする様子　（例）目覚ましい進歩

関連語２　目まぐるしい→変化が激しく目がまわるようだということ　（例）目まぐるしい変化

留保＝りゅうほ→決定、決断、処理しないで一時とどめておくこと。「保留」でも同じ。サスペンド

契機＝けいき→変化のきっかけ・転機

イデオロギー→根本的なものの考え方・思想。歴史的社会的に形成された主義主張

古色蒼然＝こしょくそうぜん→時代もの、いかにも古めかしく見えるさま
系統＝けいとう→一定の順番にもとづくまとまり。グループ分け
欺瞞＝ぎまん→あざむき、だますこと。ウソ
破綻＝はたん→修復不可能になり行きづまること
サンスクリット語→古代インドの文章語（文語）、梵語（ぼんご）。古代インドのしゃべり言葉（口語）は、パーリ語。仏教の開祖、ブッダのことばはサンスクリット語で記録された。その後、仏典は中国で漢字を当てられ、さらに日本にもたらされることになる
交配＝こうはい→動植物の雌雄を人工的に授精や受粉させること
体現＝たいげん→抽象的あるいは曖昧なものを具体的な形で現すこと
蛮族＝ばんぞく→文明の開けていない、遅れた民族
ピジン語→南太平洋のソロモン諸島で使われている言語
クレオール語→主にヨーロッパ語と交易で交流のあった世界各地の現地語との混合言語
由緒＝ゆいしょ→ものごとの起源と今に至るまでのながれ、いきさつ
俗謡＝ぞくよう→広く庶民の間でうたわれる歌。小唄（こうた）や端唄（はうた）という言い方もある

復習問題　第二十四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）困難をコク服して成長する　①告　②酷　③刻　④克　⑤穀

（イ）決断をひとまずリュウ保する　①流　②留　③竜　④柳　⑤粒

（ウ）ハイ棄物を適正に処理する　①廃　②灰　③排　④敗　⑤配

（エ）生物進化をケイ統的に説明する　①系　②係　③傾　④型　⑤経

（オ）草花の交ハイを実験的に進める　①輩　②灰　③排　④敗　⑤配

（カ）大気の汚センの状況を改善する　①選　②染　③践　④線　⑤潜

（キ）由ショ正しい家柄の出身である　①所　②処　③緒　④諸　⑤書

（ク）新しい作品をサン美する　①参　②惨　③産　④讃　⑤散

（ケ）図書館にカン行物を納入する　①官　②刊　③慣　④観　⑤肝

（コ）外国とのコウ易を盛んにする　①港　②公　③交　④江　⑤攻

第二十四講　言語論

《本文の対比構造》

メイン＝筆者の見解

「人間の学」としての言語学

言語混交論

言語ではなく人間が主体で言語を変える

フーゴ・シューハルト

ラフカディオ・ハーン

↕ 対比

敵役＝生物学的言語系統主義

十九世紀の生物進化論を核とする

インド・ヨーロッパ語比較言語学

言語は単純な構造から複雑な構造へ進化

相互に混血や交配を許さない・系統分立

言語純血種論

言語を不変、固定した主体と考える

《解説》

さあ、第二十四講、最終回はオリジナル問題です。設問は、小柴大輔の制作です。素材は、日本を代表する言語学者・社会言語学者の田中克彦氏の文章です。テーマとして、言語論は芸術論と並んでよく出る分野です。なお、読書上の価値も高い文章で、ことばを見つめ直すヒントをくれます。ことばという身近でありながら、それ自体を対象化してとらえることの少ないものをとらえ直します。みなさんの教養の広がりにも貢献しうるものです。なお、タイトルが『ことばのエコロジー』とありますが、いわゆる環境保護について書いているわけではありません。むしろ、ことばを取り巻く環境のことを語っていると思われます。つまり、ことばは、生身の人間が生活する社会環境によって影響され、一方で、ことばがそうした社会環境に影響を与える、そういう言語の本質を語ろうというタイトルと推測されます。

問１《空欄補充・選択肢》

敵役に関する問題です。つまり、言語はお互いにまじりあわない、「交配はありえない」、「混血を許さない」と考える立場です。言い換えれば、それぞれの言語は「系統として分立している」、言語グループ同士の境界を超えないと考える側です。したがって、③の「閉じた」が正解です。⑤の「混在した」の正反対であり、対比混乱の誤りです。①と②、つまり「複雑な」と「素朴な」は、ここでは比べられていません。正しい対比喪失の誤りです。④の「難渋な」は、物事がスムーズに運ばないで苦労するという意味ですが、スムーズかそうでないかは、これまた比べられていません。正しい対比喪失の誤りです。

問２《空欄補充・選択肢》

こちらも敵役に関する問題です。言語のまじりあいを毛嫌いする立場です。言い換えれば、交配や混血を「汚染」と考えて「不快と感じる」側です。次の段落の言葉で言えば、「言語純血種論」です。したがって、②の「言語純化主義」が正解です。③の「言語混血主義」では正反対で、対比混乱の誤りです。⑤の「言語流動主義」も対比混乱の誤りですね。最終段落からもわかるように、本文の敵役たちは、言語を「不変」「固定」したものと見なす立場ですからね。④の「環境保護主義」は、しらじらしいですね、わざとらしいですね。つくっているヤツの顔が見たいですね（私ですが）。でも、実際の入試問題も、わかってく

るとこのくらいしらじらしいですからね。ともあれ、地球生態系を守れ、という話ではありません。記述なしと言ってもよいですし、〝環境保護⟷環境破壊〟の対比ではないという点で、正しい対比喪失の誤りとも言えます。①の「論理実証主義」も×です。論理、たとえば言語表現されたものを目に見えるデータ（経験データ・実験データ・実証的証拠）でチェックするという話も本文にはありません。記述なしと言ってもよいですし、実証の有無は比べてないよ、ということで正しい対比喪失の誤りと呼んでもＯＫです。

問３《傍線部説明・抜き出しと記述》

（1）フーゴ・シューハルトは、筆者側です。正確には、言語のまじりあいという事実、本質をしっかりととらえている側です。〝言語純血種論⟷フーゴ・シューハルト〟の対比は、終わりから二段落目に「生物種的系統論と、言語混交論とのあいだにある、言語に関する重要な観点の相異」として、見事に簡潔に言い換えられています。はい、そうです、「言語混交論」です。

（2）こちらは、敵役を記述で説明する問題です。しかも、その「土台をなす考え方」をまとめます。この「土台」にあたる表現として、第二段落に「仮定」ということばがあり、また第四段落に「前提」ということばがあります。その内容を集めます。さらに記述答案の三原則、〝具体例はカット〟〝対比の表現〟〝繰り返される表現は大事〟にもとづいて答案をつくりましょう。では、ここでは、得点になるポイント箇所をあげますよ。まず、「十九世紀」という指摘が第一ポイント。次に、「生物進化論」あるいは「進化論」を核にしている、モデルにしている、基づいているという表現が、第二ポイントです。その中身として言語が「単純から複雑へ」という指摘があれば、第三ポイントです。さらに、「生物種が混血しないのと同じように」という指摘が第四ポイント、「言語の交配もない」「言葉もまじりあわない」という表現が、第五ポイントです。五つのうち、三つ取れれば合格水準です。

問４《空欄補充・選択肢》

筆者は「人間の学」、人間の活動に焦点をあてた「言語の学」を考えているのに、敵役の「生物種的系統論」の人々は、「言語

が不動の主体」と考えています。動かないで堂々とご主人様のように君臨しているのが言語だ、という感じです。ここでは、人間が従者、言われるがままに付き従う召使いのような立場になってしまいます。これが D です。直後の「使わされているだけ」という表現も決定的なヒントですね。こういうわけで、①の「受動的」が正解です。②の「積極的」や③の「能動的」では、人間が主役で主人公ということになるから、正反対ですね。対比混乱の誤りです。〝直接的⟷間接的〟は、本文では比べられてないので④の「間接的」は、正しい対比喪失の誤りです。⑤の「暴力的」は行きすぎですね。これでは受け身どころか奴隷です。〝ことばの暴力〟って表現はあるけれど、ことば自体の暴力で人間が使われているということにはなりません。ここでの正しい対比は、人間が主体で人間自体が自ら動いて言語を変えるのか、それとも言語が不動の主体か、の対比ですからね。暴力のありなしは比べられてないという点では、正しい対比喪失の誤りです。

模範解答

問１＝③　問２＝②

問３　（１）言語混交論

（２）十九世紀の生物進化論を核に、言語は単純な構造から複雑な構造に進化し、生物種が混血を許さないように、言語相互の交配もありえないという考え方。

問４＝①

はい、高３スタンダードレベル現代文の終了です。やりきりましたね、おめでとうございます。一つの講座をやり通す、一つの問題集をやり通す、立派なことです。修了証書を出したいくらいです。さて、みなさんにおすすめしたいのは、次々に新しい問題に挑んで、それらも一貫した方法で、つまり対比的に読んで解答することです。スタディサプリの現代文講座のラインナップをご活用ください。「高３トップ＆ハイレベル現代文」「高１高２現代文」を、学年問わず、ゴリゴリ、バリバリ、どしどしご利用ください。

復習問題　解答　第二十四講

（ア）④　（イ）②　（ウ）①　（エ）①　（オ）⑤
（カ）②　（キ）③　（ク）④　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）克服　（イ）留保　（ウ）廃棄　（エ）系統　（オ）交配
（カ）汚染　（キ）由緒　（ク）讃美　（ケ）刊行物　（コ）交易